

ピョンヤンは宣言する

第5章

車は夜明け前のほの暗いなかを音もたてずに走っていた。車窓の外には、まだ人間の手で治めることができない大自然の名残りであるなだらかな山々の巖かなうねりや、薄暗い林やごつごつした岩、山崩れしてそのままかたまった切り立った崖道などが限りなくつづくなかに、突然、視界が明るく開き、目の前に奇跡のように小さな市街が見えてきた。時代の気運がのぼるようによきによき建っている建造物、朝焼けで青白く彩られた壁面、打楽器の高低長短のように弾力をもって上下する屋根など…。

キムジョンイル総書記は村の通りの入り口で車を止めて外に出た。肺腑がしびれるほど清新な空気、静寂が流れる音…。キムジョンイル総書記は両手を腰にあてて、さまざまな住宅が整然と立ち並ぶ村の通りを見回した。山間の自然のなかに建っている家並は風情にとんでいた。

総書記は他の随員とともにかたわらに近付いてきたパクユンシクに、村人がまだ眠っているので車の音がうるさくないよう静かに行こうと言った。そして、静かに歩きながら通りをあちこち見回した。パクユンシクは総書記のそばに歩みより、他の随員は後からついていった。

キムジョンイル総書記はおぼろに見える家並の窓をながめながら歩いた。その一つ一つがそれぞれの住人の表情をうかがわせた。そうして見ると、その窓に人々の願いと希望、喜びと誇り、他人の知らない苦勞がこもっているようにも見えた。皆、何を食べ、休息はどのようにとっているのか… 家族は睦まじいか… 子どもたちはりっぱに育っているのか… 際限なく心配なことが浮かび、歩みを止めて念入りに暗い窓を見つめることもあった。

遠くから、夜明けの鶏の鳴き声がときどき聞こえてきた。ふと、前方に人の気配がした。急いだ足音… 三人の人影が通りの真ん中をそそくさと走ってきたが、こちらを見てたじろぎ、立ち止まった。次の瞬間、喚声がおこったかのように静けさが破られ、彼らは道の真ん中をバタバタとわれを忘れて走ってきた。郡党組織書記と行政経済委員会委員長、副委員長だった。

キムジョンイル総書記は彼らの手を一人一人熱く握った。郡党責任書記は見えなかった。たぶん、活動停止処分を受けて出てくることができなかつたようだが、彼については問わず、明るい顔で三人の活動家を見回した。

「この間、たくさん建設をしました。新しく建設された住宅を見ようと来ました。どんな家を人民に贈ろうとしたのか、ちょっとわれわれに自慢してみなさい」

「少し建ててみたのですが、十分なものではありませんでした」と、建設を担当した副委員長が一歩進み出て言った。

「結構です。見に行きましょう！」

総書記はクヨンセの案内で、道端の5階建て住宅に入っていった。廊下の向こう側の部屋で、女性がむずかる子どもをあやす声が聞こえてきた。その女性は自分たちのアパートにだれが訪ねてきたのかも知らず、子どもを大きな声で叱ったりした。

総書記はクヨンセが案内するまま上の階に上がり、随員たちに「シーツ、静かに…静かに… 人々が目を覚ますよ…」と小さな声で言った。

クヨンセは2階に試験的に作った一つの部屋に総書記を案内した。彼が廊下の壁のスイッチを押すと、部屋と台所、廊下とトイレに明るく電気がついた。

「この部屋はどうして誰も住まず、空いたままなのですか？」

「最初に建設するとき、モデルとして作り、建設者たちが来て見て、この通りに作るようにしました。今は里から来て見学するように残しました」

総書記は三間の部屋をゆっくりと見て、注意深く隅々まで見回し、壁紙も擦ってみて、部屋の床もあちこち手をついて見た。そして、廊下に再び出てトイレと物置のドアを開けてなかを念入りに眺め、台所に入りタイルを貼ったかまどを触ってみて、その高さや広さをはかり、調理台や棚ももれなく見て、水は良く出るか蛇口もひねって見た。

総書記は両手を後ろに組んで台所の中を再び見回し、この程度なら女性たちが炊事をする上で大きな不便はないだろうと考え、微笑がこぼれる顔で道党責任書記をふりかえった。

「台所の広さもこの程度あれば心配ありません。台所の構造については、女性の意見を聞いてみなければならぬが... 少し聞いてみましたか？」

「はい... 来て見て、みな広くて良いと言いました」と、クヨンセが答えた。

「人々は自分の識見によって見たこと、感じたことを言います。活動家は人民が良いと言ったからといって安心してはなりません。わたしの見たところでは、かまどと調理台が少し低い気がします。これでは、炊事をしながらずっと腰を曲げなくてはならず、一日も欠かさず生涯三度の食事を作らなくてはならない女性たちがどれほど不便か、また、年を取ると腰が痛くなるのではありませんか。見たところ、この家も男性が設計したようだね」

「はい... そうです」と、クヨンセが答えた。

総書記は微笑を浮かべた。

「これを見ると... ほう、われわれの男性同志たちは炊事をする女性の苦勞については理解しようとせず、部屋に横柄に座ってもてなしを受けることばかり考えているようです。社会主義革命はしたけれども、家庭の倫理的なことについてはまだ... まだ... われわれの男性同志の頭のなかに封建時代の遺物が残っています。それゆえ、女性の苦勞や苦衷を深く考えず、理解しようとしもない、そうではありませんか？」

道党責任書記と郡の活動家たちは、顔を赤らめてぎこちなく笑った。

「解放直後には中央機構がよく整えられておらず、迎接部署のようなものがとくにありませんでした。そのため、高位級の外国の訪問客が来たときは、わが家で宴会を催しました。そのたびに、母は台所で戦友だった女性闘士とともに早く帰って料理をしましたが... 饅頭をつくりながら腰が痛い、『女性解放歌』を歌いました。主席はその歌声を聞くと、書斎から台所に出てきて二人を手伝い、饅頭を作りました。その腕前が並ではありませんでした。台所では『女性解放歌』の三重唱が朗々と響きました。主席が三大技術革命の課題を提示し、女性を家事の重い負担から解放する問題を提起されたときのことが思い出されます。...われわれが少し苦勞してでも、女性が腰を伸ばして台所仕事ができるようにしましょう...」

道党責任書記は考え深い目でキムジョンイル総書記を仰ぎ見、クヨンセは手帳を開いて総書記の言葉をもらさず書き留めた。彼の目には涙が光っていた。

キムジョンイル総書記は台所から出て再び下の部屋に入り、窓際に立って考え深いまなざしであちこちを見回した。部屋は適当な広さでこじんまりと整えられていたが、どこか全体が調和せず、しっくりしなかった。

(どうしてだろう？) と考え、はめ込みの押し入れの戸や家具を眺めていた総書記は、心のなかで食卓のまわりに若い父親と子どもたちを座らせ、タンスの前に若い妻を立たせてみた。家具が部屋と家族に不釣合なのだった。

キムジョンイル総書記は内側からゆっくりと歩み、はめ込みの押し入れの戸やタンスの角をなでて、要所要所を丹念に調べた。どの家具も多少ぞんざいに大ざっぱに作ったことが歴然としていた。はめ込みの押し入れの戸がきちんと合っていないかった。塗りも濃く塗らず、どの家具も白っぽい感じだった。つぎの瞬間、総書記の目を引いたのはタンスの戸だった。木目がこまかくない板で作られていた。かえって、タンスの側面に使われているものの方が良質だった。

総書記は寛大な微笑を浮かべて、クヨンセをふりかえった。

「これをちょっと見なさい。このように木目のきれいな板を戸にあてがい、木目のあらい板は目に見えない側面に使えば良いのではありませんか？ この家具工場の支配人はだれですか？」

クヨンセは再び顔を赤らめたが、感動と喜びに輝く目で総書記を仰ぎ、低く答えた。「道にいて、数年前にここに来たトムムです。還暦を過ぎました... わたしが活動を緻密にできませんでした」

「副委員長が家具の欠点までみな探す必要はありません。下部の活動家をよく教育しなくてはなりません。スミョントムムの話では、幹部にあてがうタンスは特別に誂えたそうですが、人民にたいしてはどんなふうに作ってやってもかまわないと考えているため、このように作ったのではありませんか？ 民衆にたいする思想観点の問題です。仮に、自分の身内が使うタンスを作るとしたなら、このように難のある板で戸を作り、木目の良い板を側面に使うでしょうか？ これは、わが人民をないがしろにし、人民に背くことにほかなりません。われわれは早くから家具革命を起こそうと呼びかけました。技術問題もありますが、主には活動家の思想観点、人民性に問題があり、よくできていません」

つづけて総書記は、郡には林もあり家具工場もあるのだから、今後、家具生産を展望をもって発展させ、すべての住民世帯に立派な形のよい家具を入れてやるようにしましょうといった。

キムジョンイル総書記は人民生活について議論するときには、ひたすら楽しく興奮して、時がたつことも苦勞もしらず、疲勞も忘れた。この夜明けもまたそうだった。それで、住宅の暖房条件を改善して窓はみな二重窓にし、冬には女性たちが冷たい水ではなくお湯を使えるように関心を払わなくてはならないと言った。

「われわれは家を一棟建てるにも、家具を一つ作るにも、まず人民のことを考えなくてはなりません。人民の意にかなうか、人民の嗜好がどうで何を要求しているのかを具体的に知り、それにあわせて仕事をしなくてはなりません。われわれの活動家は民衆を統治し権勢をふるう官僚ではなく、人民の僕しもべです。僕！ このような自覚をもつのはけっして容易なことではありません。人生観の問題だからです。人民とまったく同じように食べ、着て、暮らすことを当然のことと見なし、人民に献身服務するところに自分の人生の誇りと楽しみを感じるのか、人民がどのように暮らそうと自分のためだけに頭を使い、動き、他人よりりっぱな衣服をまとい、おいしい物を食べるところに人生の興味を感じるか... 革命家の人生観と俗物の人生観... 口にする言葉ではなく、深くかくれているこのような人生観の差異が、事実上、仕事を左右します。このタンス一つをとっても、活動家の人生観と結びつけて考えなくてはなりません。

活動家を正しい人生観で教育することが非常に重要です。チュチェの人生観が正しくうちたてられれば、仕事はおのずとうまくいきます」

キムジョンイル総書記はついてきた随員があせった顔で時計をみるのが目に入ったが、気がつかないふりをした。郡をもっと見回りたかった。建設場と営農の状況、人民生活をもっと幅広く深く知り、そ

れを通じて党政策の生活力と郡党委員会の活動を了解し、一つでも助けたいという心情に燃えていた。

総書記が玄関を出ると、階段の下で一人の活動家が腰をまげてあいさつした。郡党責任書記のチャヨンジンだった。木炭のように真っ黒に日焼けした顔、光る目、性急な熱い息遣いがはっきりと目に入った。会う前にはあれほど心配した彼だったが、会った瞬間、火のような憤激、どのように仕事をしたので申訴までされるのかという怒りがわき起こったが、辛うじて押さえた。押さえて彼の手を握り、何も言わずに歩いて外に出ていった。チャヨンジンは瞬間、背筋に冷たい汗が流れおちた。

大切に信頼するほど、活動と生活において高い要求を提起し、塵ほどの欠陥も許さず厳しく処理する総書記の気概と人柄をよく知っている道党責任書記が、ヨンジンの脇腹を軽く小突き、ついてくるようにと目配せした。事実上、憤激をそのままさらけ出してあれほど厳しく対応されたのは、格別の信任を受けている活動家だけが受ける特典といえるものだったからである。

キムジョンイル総書記は、クヨンセの案内を受けて体育館建設場の方に闊達に歩いていった。

建設場にいたり、クヨンセが電柱台につけてあるスイッチを入れると体育館の内外の作業灯が明るくともった。広い敷地に薄暗く建ちならぶ壁体は、何か城壁のように現われた。壁体についた梁の型やそこにジグザグ型に乗せられた足板、古い小型鋼鉄起重機と木製起重機、旧式のウインチと壁体の上にぶら下げられる滑車が、建設者たちの労苦を物語っているようだった。

総書記は両手を腰に当てて建設場を見回ったが、壁体の横に列をなして置いてあるトラスをじっと見つめた。

「自力で組み立てたのですか？ 力学計算も自力でおこなって？」と、総書記はクヨンセをふりかえった。彼はどういうわけか沈鬱な目でトラスの方をちらっとながめ、かろうじて答えた。

「はい... 製鉄所から少し助けてもらいました」

総書記は近くに粗雑に置いてある木製起重機に見入っていたが、何も言わず体育館のなかに入っていた。体育館のなかには冷たい風が吹いているようだった。

総書記は体育館の真ん中に立って、まだ床面のセメント工事も終わっていない室内競技場やレンガで築いた観覧台や、空が見える天井をぐるりと見回したあと、構想が大胆なことに満足し明るい顔で言った。

「大胆です！ 結構です！ 郡にこれくらいの体育館があれば、体育文化事業を発展させることができます。郡が思想、技術、文化革命の拠点として自らの役割をはたすためには、このような体育館もなくてはなりません。以前、わたしは郡をおしたるために朔州郡に行き、実態を了解して論文を書いたこともあります」

「このトムたちが朔州郡を参観してきて、建設を始めました」と、道党責任書記が静かに言った。

「うむ...」

キムジョンイル総書記はまた、言葉なく熱いまなざしでクヨンセをふりかえった。

「トムはあまりに謙遜なようだ。少し大げさに自慢してみなさい。どのように作ろうというのか...」

クヨンセは困った顔で後ろをちらりとふりかえった。その瞬間、随行員の後ろに立っているチャヨンジン責任書記の暗い顔が彼の視野に飛び込んできた。道党責任書記が手振りでクヨンセに催促した。

「さあ！...」

クヨンセは手をあげてあちこちを指差し、活気のある声で説明した。

「あちら側には選手の脱衣室兼休憩室と審判員の部屋、トイレをつくろうと思います。ここに、郡体育指導委員会も置こうと思います。あの左側には配電盤がある技術室、その横には体育器材倉庫、管理人の部屋も作ろうと思います」

「いいね、その通りにつくりなさい！」

「はい... ここでは、バスケットボール、バレーボール、テニス、卓球、機械体操、新体操... 室内競技はみなできるように作ります。将来は小さな規模のマスゲームも組織しようかと思います」

総書記は説明を聞いて、体育館の砂の床を見回していたが、「床には何を敷くのですか？」とたずねた。

「板敷きにしようと思います。家具工場で桐の木と藤の木で試作品を作りましたが、質は心配ありません」

「結構です。そうなれば室内競技はもちろん、この山里の少年たちも新体操をすることができます」と、総書記は非常に満足した。

「照明施設をよく整えることが重要です。照明問題は中央で援助するようにしましょう。りっぱに整えれば、ここで道の競技だけでなく、個別の体育種目の全国競技もできるでしょう。それを想定して近くにスポーツ選手の利用するホテルも一つ作るのがよいでしょう。道で援助しなさい」

クヨンセは喜びに満ちて顔がぱっと明るくなり、道党責任書記は慎重な表情で総書記の言葉を手帳に書き留めた。キムジョンイル総書記は後ろ手を組んで、彼らの前を行ったり来たりしながら、言葉を続けた。

「ここで道級、中央級の競技がときどき開かれれば、郡内の人民の体育にたいする関心も高まり、自ずと文化水準も高まるでしょう。そうなれば、都市の文化が郡を通じて次第に農村に入り込むようになります。われわれは大都市にすべてを集中させることを極力制限しようと思います。大都市本位の文化は資本主義の歴史的遺物です。われわれは全国のすべての勤労人民大衆が文化的恩恵も均等に受けるようにしなくてはなりません」

キムジョンイル総書記はふと歩みを止めて、思索にふけるような目で虚空の一点を見つめた。もう一つの思いが脳裏をよぎった。平野地帯の郡でもりっぱな体育館がないのに、経済的な元手も弱くすべてが不足しているこの山里で、このような体育館を建てている。財政が余って手に入り、物資が豊かであるからではない。人民により文化的な生活をもたらそうという熱情、理想、革命的な口マン！ このような品性が革命と建設を高揚させるうえでどれほど重要なものか！

惜しめない贅辞をおくり、彼の手でも熱く握ってやりたかったが、そのような素振りは見せず、かえって実務的な語調でたずねた。

「天井に横たわっているトラスは力学計算をよくおこなって組み立て、溶接技能も高くなくてはなりません... 製鉄所からすこし援助をうけたというのはどういうことですか？ 援助する場合には最後まで援助しなくてはならないのに...」

クヨンセは目を伏せて立っているだけで、答えられなかった。

「工業が農業を、都市が農村を助けるようにというのは、わが党の一貫した要求ですが、製鉄所のトムンがみみちちくて最後まで助けなかったのですか？」

「技術者と溶接技能工たちが来て助けてくれたのですが、製鉄所から住宅建設を大々的におこなうため召喚されました」と、道党責任書記が報告した。

「製鉄所は大きな世帯なのに、技能工の一人や二人がいらないからといって住宅建設ができないのですか？」

「このトムンたちにも、すこし意見があるようです」

「リグンウ支配人の性分には合わないようだが... だれがどうして召喚したのが明らかにしなさい。具体的に...」

「はい... わたしが製鉄所の労働者に再度よびかけます」と、道党責任書記は腕時計を見た。すでに

日はすっかり明けていた。

キムジョンイル総書記は随員とともに新しく建設した文化会館と人民病院も見回った。体育館建設場で満足した総書記は文化会館と病院まで見て、郡党責任書記が仕事をたくさんおこなった理想の高い活動家であると考え、知らず知らずに後ろの方をふりかえるようになった。郡党責任書記はたくさんの仕事をしながらも活動停止処分を受けて前に出ることができず、活動家たちの後ろで翼の折れた鷹のような身の上になってついてきていた。道党責任書記は、きょうを心待ちにして仕事をしてきたのに折悪しくねじれてしまった彼に同情したのか、前に出るようにと二～三度手招きしたようだったが、チャヨンジンには前に出ることができなかった。

総書記はすべてを見て感じ、彼のために胸が痛んだが、そんな素振りを見せず、平屋建て住宅が集まっている村の通りの端まで行って見て、再び歩みを移して小川のほとりの東端まで出ていった。

村の端を曲がりくねって流れる小川の水は煙のような霧をわきあがらせ、たえず水音をたてていた。幅は狭いが速い流れだった。水は川底の岩の上を戯れるように飛び越え、早瀬の下に水の泡をたててほとばしり流れていた。

総書記はその騒がしい流れをしばらく眺めていたが、クヨンセに、あの流れはそのまま流してしまうのかとたずねた。

「今後、あの下方に堰をして、小型発電所を作ろうと思います」

「そうするのが良いでしょう。電気も生産し、また水をせきとめてボートを浮かべれば水遊び場になるではありませんか。この山里の子どもたちもピョンヤンの子どもたちのように船遊びもしながら育っていけば、どんなに良いことでしょう。わたしはこの間、つねに言っていますが、わが人民がだれもみな、自分が住んでいる故郷でわれわれ式社会主義制度の優越性を感じるようにしなくてはなりません。ここに合成樹脂製の現代的なボートを送るようにしましょう...」

郡の活動家たちは喜びに胸がいっぱいでどうすることもできなかった。

「郡を社会主義の理想郷に作っていこう！」

人々が興奮にざわめいているとき、キムジョンイル総書記は随行員の側に立っているチャヨンジンに視線を移した。そして、近くに来るように手招きをした。

チャヨンジンはとたんに、顔色がさらに黒くなり、コチコチになって近付いていった。

「あちらの方にちょっと行こう！」と、総書記は先に立って歩いた。チャヨンジンは総書記の後にしたがった。道党責任書記をはじめ他の幹部はみなその場に立っていた。

小川のほとりに漂う乳白色のうす霧が総書記の重い足に絡まり、散っていった。総書記は芝生の中におかれている黒く平たい岩をさがすとそこに腰をおろし、ヨンジンにも側に座るように勧めた。彼はしばらくもじもじしていたが、再度促されると岩の端につつましく座った。

キムジョンイル総書記は深い情のこもった声で、健康状態や家庭生活、学習状況についてたずね、さらに今回の申訴についてどのように考えているのかとたずねた。

「事実はどうであれ、そんな芳しくないことが提起されたことについては責任を感じます。郡党責任書記が自分の郡の管轄の住民から申訴を提起されたということは、党の権威を落とすこととして、当然責任を取らなくてははいけないと思います」

「うむ」

「それで、わたしは数日間、その問題について深くふりかえって見ました。主観的には党の意図を受けて、郡内の人民のために何かをしようと苦勞したのに、どうしてそんな申訴が提起されたのかと恨めしくもあり... ときには、申訴者にたいし良くない考えをもったこともありました」

「申訴者がだれか知っているのか？」

「偶然に知りました。退勤の途中、一人の青年がわたしを見ると避けて逃げ出したので、確かめてみると製紙工場にかよっているリチャンギルというトンムでした。今まで道でわたしを見て避ける人は一人もいませんでした。避ける青年を見た瞬間、あのトンムが申訴したのだと思いました」

「会ってみたのか？」

「会っていません。食料工場支配人の彼の姉から彼を都市に移してくれと何度か頼まれたのを、原則だからといって、わたしは... わたしは... その問題について非常に軽率に対しました」

「わたしも聞いた。リュスミョントムは、申訴された問題のなかで根拠がないものが何かを報告し、トンムを擁護しようとした。彼がだれか知っているかね？ リュスジン博士の弟だよ」

「はい... 似ているので...」

「しかし、行方不明の人にたいしては結果をみて批判せよというのはどういうことだ。うん？ 過誤を認めるのがそんなに苦しいのか？」

心の傷を撫でてくれるような総書記の柔らかい声に、ヨンジンは喉がつまって答えることができなかった。

「トンムは彼がきっと帰ってくると信じているのではないのか。うん？ どこに行ったのかな？」

「キムジョンイル総書記、あまり心配しないでください。そのトンムが帰って来ました。三時間前にわたしの家をたずねて来ました」

チャヨンジンはそんなに嬉しい知らせなのに、どうした訳か心が乱れ掠れた声で言った。

「なにがあったのかね？」

「はい...」と、彼は驚くべきことを言った。

...チュサンミンは自分にたいする世論がだんだん険悪になり、検察所の注意が自分に向けられると、不安で焦燥にかられた。以前の病的な神経過敏の状態に戻り、夜もまんじりともできなかった。彼は不良セメントを建設場に送ったという噂に強く反発した。どうして他のことは目をつむり、セメントだけがめめるのか、施工には問題がないのか、これは自分の父の罪と自身の以前の過誤、今回の事故を人為的にむすびつけて考えるとところからきた先入観のせいだ、科学的な原因究明ではないと言い訳をして鬱憤を爆発させた。

彼は、自分が生産したセメントの質を固く信じ、事故の原因は施工を間違ったところにあると考えたようだ。自分自身も納得できぬ汚名を受けるのに腹が立つが、さらに、自分を信頼してくれた郡党責任書記にまで累が及ぶことを考えると、胸が塞がる思いだった。座してただ結果を待つわけにはいかなかった。

セメントの質についての科学的な分析資料で無罪を論証しなくてはならなかった。雨風が一度に吹きつけ稲光りが閃く深夜に、彼は事故現場で壊れたコンクリートの破片を集めて、人知れず村の通りを抜け出して道セメント工場に向かって走ったが、再度考えてみて、製鉄所の分析室をたずねた。

道のなかで一番信憑性があるその分析室に、中学時代の友人が分析技師として働いていた。ずぶ濡れになってガタガタ震えている受難者から尋ねてきたわけを聞いた旧友は彼を哀れに思い家にかくまって、三度にわたって分析実験をおこなった。しかし、分析結果は青天の霹靂だった。事故の原因は施工ではなくセメントの質にあることを、弁明の余地なく証明したのである。

分析技師は暗い顔で、以前に郡におけるセメントの強度実験をどのようにおこなったのかとたずねた。

チュサンミンは、技術検証をよくおこなっていない製品をおくったのが禍根であったことを、はじめて悟った。

セメント生産が始まった初期には、その強度実験のための技術的条件も中途半端なものだった。さらにセメント生産が成功し、皆が歡喜に酔っているときだった。ある日、チュサンミンは技術的な援助を受けたいと思いセメント工場に出かけ、技能がそれほど高くないトンムたちに製品検査を依頼したが、三日間後に返ってきた検査結果については検討していなかった。生産が技術的要求通りにできることを知り、製品の質を信じたのだった。原料の選別と混合工程に問題があるのは明らかだった。どうであれ、重大な責任はチュサンミンにあった。分析技師は旧友を運命の奈落に落とす分析表を破ってしまおうとした。チュサンミンはそれはできないと止めた。彼は懲罰が待っている郡に帰り、村の裏山の林の中に隠れて悩んだが、郡党責任書記をたずね、その分析表を差し出し自分の罪を認めた。

「...その分析表を見ると、ここの法機関が専門家に依頼し分析した資料と同じでした。いまとなっちはどうにもならなくなりました。まず、壁にひどく亀裂が入ったアパートを壊して再度建てなくてはならず、彼を法的に処罰しなくてはならなくなりました」

「そうか... どうにもできない... どうにもできないというのか？」

「はい...」

「わたしは違う考えだ。違う... 違う考えだ！ 彼は自分に非常に不利な、政治的生命を失うかもしれない実験検査表を破るのでなく、そのまま持ってきてトンムの前に出したのだ。こんな人を罪人として処罰するだと！ こんな良心に対して顔を背けるといふのか？... わが党の活動家が、わが共産主義者がこんな冷血人間なのか？！ もちろん、郡ではアパートを一棟また建てるのはたやすいことではないだろう。しかし、彼の良心の価値はそんな物質的な損失よりも貴重なのだ。百倍、千倍も！...」

チャヨンジンは積もり積もった感情が堰を切ったように溢れ、自分を押さえることができず嗚咽した。

「キムジョンイル総書記！」

彼の目の縁や鼻の頭に熱い涙の粒が飛び散った。

「建設することよりも破壊することの方がたやすいように、信じ愛することよりも疑い排斥することの方が易しいことだ。わが党は、チュチェ革命偉業の勝利のためについてくる人は一人でも多く包摂し押し立てなくてはならないのだ。それゆえ、われわれは破壊ではなく建設を、疑心と排斥ではなく信じ愛するという難しい使命を自ら担う革命家なのだ。人間にたいする信頼と愛がどんな力を生むかはわが党の歴史の全過程がよく物語っている。わたしは彼を信頼する。彼の良心を見て... トンムはどうだね？」

「！...」 ヨンジンはありがたさに頭をたれて、すぐに返事ができなかった。

キムジョンイル総書記は銀灰色にきらめく小川の流れをじっと見つめていた。しんとした静けさ... 近くの茂みで朝露が落ちる音さえ聞こえるような...

「そんな良心に顔をそむけることに慣れるなら、わが党は民衆を懐に抱くことができない。絶対に... だれが何と言おうと動揺せず信じるのだ。信じるなら徹底して信じなくてはならない。人によって枠を設け、これくらいなら信じ、これくらいなら信じないというようにおこなっては一心団結を成し遂げることができない！ 徹底して深く信じなくては。自分の活動の正当性... 自分が参加しているチュチェ革命偉業の正しさとその強い牽引力を確信する人だけが、そのようにできるのだ。信念が弱い人はだれをも深く信じることができない。徹底して深く信じなくてはならない。そのような信頼について意識するとき、大衆は無限の力を発揮するものだ... たとえどんな困難なことが生じても、自分の後ろに党中央が、われわれが立っているということを考えて、自信をもって人々を抱擁しなさい」

チャヨンジンはわきあがる激情を押さえようとして両膝をしっかりと掴み、顎をぐっと引いた。

「人が仕事をしようとするれば過ちも犯すし、どんな損失をもたらすかもしれない。だからといって、

助ける代わりに処罰だけするとすれば、どうなるだろうか」

「...チュサンミントムを、彼を...処罰せず支配人としてそのまま働くようにしてはいけないうか?!」

「郡党責任書記がそのように信じるなら、わたしも信じる！」

「キムジョンイル総書記！」

「ヨンジントム、りっぱに仕事をしなさい」と、総書記は膝の上で震えている郡党責任書記の手を熱く握った。

東の空がすっかり明るくなり、木立ちの梢では眠りから覚めた鳥たちがさえずりはじめた。

第6章

太陽が昇った。

まぶしい太陽が昇った。

郡全体が急に動きだした。

キムジョンイル総書記が郡を現地指導されたというニュースが、燦々とした朝の日射しとともに通りと村に広がったのだ。

新聞やテレビを通じて総書記の映像を見るだけだった僻村の人々は、自分たちが深く眠り込んでいた時刻に、総書記が自分たちの家の窓の前を通り過ぎ、アパートの階段を上がり、自分たちが通る道を歩いて行き、自分たちの職場を見回って、ほかでもなく、自分たちの暮らしを良くしようと心を砕かれたということが分かったとき、感動せずにいられなかった。

人々は泣き、笑い、感激と興奮、幸福感を分かちあった。キムジョンイル総書記が見回ったアパートの下の階に住む可愛らしい女性は、夜明けにむずかる子どもをあやしているとき廊下で足音がしたが、何も知らなかったといって地団太を踏んだ。平屋の住宅に住む90歳になるお婆さんは、明け方まどろんでいたが、自分の家に虹がかかった夢を見たといって涙を流した。家のなかに座っている人は一人もいなかった。皆がこの家、あの家と行き来して、あるいは通りに走り出て騒ぎ立てた。総書記が見回った体育館建設場の方に走っていく青年たち、総書記の靴の跡がついた小川のほとりに走り出る乙女たち... 村の通りすべてがざわめいた。街路樹、道、家々、小川の水、空気、山野... すべてが新しく誕生したように新鮮な生気を吹き出していた。

9時ごろにはすでに、村の通りをゆっくりと移動していく宣伝車から、「キムジョンイル同志の歌」の合唱とともに、総書記の現地指導のニュースを伝える感動的な声が流れてきた。

宣伝車のなかでは、いつもの放送員の乙女ではなく歳のいった郡党宣伝書記が直接マイクをもって、拳をふりながら呼びかけていた。

「修正主義者たちの『ペレストロイカ』の風によって、国際情勢が険悪になり、アメリカ帝国主義者がわが共和国を圧殺しようとあらゆる手段を使っているとき、キムジョンイル総書記は千金のような... まさしく千金のような時間をさいて、きょうの夜明けにわが郡を現地指導されました。僻村に住むわが郡の人民が豊かに暮らせるようにしよう... われわれのことを心配されて... 同志のみなさん、郡内のすべての党员と勤労者のみなさん、青年学生のみなさん、キムジョンイル総書記の事跡が刻まれた栄光の地で暮らすことになった榮譽と誇りを胸に深く刻もう！ ソンタンは昨日のソンタンではない。この栄光の地に社会主義の地上の楽園を築こう！」

そのとき、チャヨンジンはセメント工場の事務室でチュサンミンと向かい合って座っていた。

郡党責任書記がキムジョンイル総書記の信頼について、総書記がわたしも信じると言われた言葉を伝えたとき、共和国の制度に背いて逃亡した反逆者の息子、父が捨てた幼子を党が懐に抱いて育て、学ばせ、信頼して、今日では支配人にまでなった彼...チュサンミンは、茫然と大きく見開いた目で責任書記を見つめ、何も言えず唇を震わせていた。そうして机に突っ伏して子どものようにしゃくりあげた。彼の激しいすすり泣きで机がゆれうごいた。責任書記も首をたれて涙にぬれ、言葉がでなかった。側に座ったパクジェスンも片手で額を押さえて黙りこんでいた。

しばらくして、泣き声がおさまると、チュサンミンが涙でくしゃくしゃになった顔をあげた。

「キムジョンイル総書記はわたしの恩人です。恩に報います... セメントを... 千年も万年も壊れないものを作り出します」

郡党責任書記は手をさしだして、彼の拳を壊れるほど強くつかんだ。

燃えるような目と熱いまなざしが互いに絡み合った。

第7章

運転手の後から乗用車を降りたリュソンヒは、運転手を取り出してくれたトランクを受け取り、通りの風景や自分の影を映している大きなガラスのドアの方にまっすぐに歩いていった。

リュハンム老人とリュスジン博士は車の中でしていた話を終えて車外に降り立ったが、ソンヒはすでに入り口の足踏みに立って自動ドアを開け、父と祖父を待っていた。遠くに旅立つ父を見送ろうとピョンヤン飛行場まで出てきた娘は、かなり興奮して浮き浮きしているようだった。リュスジンは謹厳ですこし不安げな顔で、開いたドアの方にゆっくりと歩いていった。一か月前に、彼が留学したモスクワ工業大学から、卒業生の同窓会を開くので参加してほしいという招請状を対外文化連絡委員会を通じて送ってきた。

飛行場の待合室は乗客が多かったが、それほど混雑する便ではなかった。

父を先に入らせたソンヒは片方の手にトランクを持ち、もう一方の手で祖父の腕をとって、旅行手続きをしようと音もなく行き来する人々の間をぬって中に入り、窓際のベンチに座った。リュハンム老人は孫娘が何度勧めてもベンチに座ろうとせず、木像のように立ったまま後ろ手を組み、厳粛な顔で忙しく行き来する様々な外国人を眺めていた。時々、警戒の色を光らせる彼の視線は、外国人のなかに陰険な謀略を企む輩がないかを見張っているようでもあった。

ソンヒは、祖父のそのような氣勢に笑いがこみあげ手で口をおさえたが、そうするうちにしだいに緊張し、まっすぐな視線でむこう側の外国人の中に入り手続きをしている父ばかり見守った。

外国旅行が初めてではないリュスジンは手順よく航空券を買った後、税関検閲を受けるための用紙に記載事項を書き込んでいた。だれかが側に来てうれしそうにあいさつしているようだった。

思い返してみると、ソンなんとかいうあの青年だった。

「どこにおいでですか？」

「おう、君か... モスクワに行くのだよ」

「代表団として行くのですか？」

「ちょっと出張に行く用事があって...」

「ええ... わたしはわが国に来ていたタイのお客様を送りにきました」

「あちらにソンヒも来ているよ」

リュスジンはどさくさに紛れてそんなことを言った。喜ぶ彼の好意に警戒心をもって対することがで

きなかったのか... 青年は瞬間、顔がぱっと明るくなってふりかえり、あちこちキョロキョロ探して、側に来たずんぐりとしたアジア人を連れて向こう側の窓際に近付いていった。

ソンヒは、自分の前に不意に現れたソングソンを見ると、あまりに思いがけず顔を真っ青にしてしばらくじっと見つめていたが、立ち上がって祖父を紹介した。彼は老人に丁寧に頭を下げ、あいさつした。そして外国の訪問客に英語で何か話すと、彼は驚いた目をしてリュハンム老人を見あげたが、頭を深々と下げた。それからソンヒには感じの良い微笑を送り、うなずいてみせた。

ソングソンは喜びにたえないように目を輝かせ、上機嫌で話した。

「このビジト先生はわたしの会社と貿易契約を結び、西ドイツに行きます。西ドイツで仕事がうまくいったなら、すぐ本国に帰るといことです。イギリスのマンチェスターで大学を優秀な成績で卒業して、アボジの遺産を受け継ぎ、財界に進出したすぐれた実業家です」

タイの客は彼が何を言っているのか分からず、漠然とした微笑を浮かべて彼を見守るだけだった。

「ビジト先生は今度の機会にわが国にたいする良い印象を受けたと言いました。わたしをバンコクに招請しました。もちろん、外交辞令でしょうが... わたしの英語が正確で流暢なので、旅行中、言語の障壁をまったく感じなかったと言いました」

そして、タイの訪問客に自分が言った言葉を説明しているようだった。タイの訪問客は喜び、両手をあわせて何か言い腰をかがめた。

ソンヒは顔を赤らめて曖昧に笑ってみせたが、外国人を連れてきてこんな見栄っ張りな場面を演出している彼から、ある示威的なものを感じて不快感もなくはなかった。一人の外国人に対する礼儀は礼儀であり、祖父も親切な言葉をいくらか言ってくれたらと期待したが、リュハンム老人は最初は好意的な微笑を浮かべていたが、放心したような目付きでタイ人を見下ろしていた。

彼らが立ち去るとリュハンム老人はベンチに腰をおろし、孫娘に低くたずねた。

「あの青年はお前とどんな関係なんだね？」

「...」

孫娘の青ざめた顔と沈黙が普通ではない関係を暗示した。

「うむ... 賢そうに見えるが... ちょっと肝っ玉が小さいのではないのか?... 肝が... え？」

そのとき、金属音の混じったアナウンスが待合室に流れた。ピョンヤン発モスクワ行き定期便に乗る乗客は速やかに税関検問を受けるようにということだった。にわかに入客が動きはじめ、待合室の空気がざわめいた。人混みの中をかきわけて来たリュスジンが窓際に近づき、父と娘に行ってきますとあいさつし、もう帰るよと言った。

リュハンム老人は、展望台に出て飛行機が離陸するまで見送ろうと言うと孫娘とともに席から立ち上がり、息子の後にゆっくり従った。

その日は気象条件も良く、大型ジェット旅客機は定時に滑走路にそって矢のように走った。乗客室中ほどの座席に座ったリュスジン博士は、楕円形の飛行機の窓を通して台風が通り過ぎていくような飛行場の風景を見下ろした。飛行場の展望台で数多くの人々が手を振っていたが、父と娘がどこにいて誰が誰なのか見分けることさえできず、注視しようと飛行機の窓に顔をくっつけた瞬間に、展望台ははるか後方に紙の家のように飛び去ってしまい、山並みのうねりや青い空が斜めに迫ってきた。不思議な混乱の中で耳がわんわんとなり、体と胸が地球の引力圏から抜け出して無引力、無重力の無限大の空間に飛び出したようにすべてがとけあった。しかし、父が別れる前に無言で手をしっかりと握ったとき、胸に込み上げた情は忘れることができず、忘れてはならないもののように感じられ、果てしない空に高くあがるほど胸を熱くした。

リュハンム老人は、二人の息子のだれかが外国旅行に出発しても、いつも飛行場に見送りに行くことはなかった。今回は公的な代表団ではなく個人の資格で、それも情勢が複雑な国に重要な使命を帯びて行くためにとても不安だった。

リュスジンがモスクワの大学の同窓会に行くことになったという知らせを聞いたとき、家族のなかで一番気に入らなかつたのも老人だった。彼はとりたてて行くなどとは言わなかつたが、こんなときに同窓会とはどんな奴の同窓会なのかとぶっきらぼうに何度かはき出すように言ったかと思うと、招請状を受け取り受諾した息子をとがめもした。

リュスジン博士もまた、行きたいという意向など最初から全くなかつた。研究所と科学院の党委員会にもそのような意向を表明していた。彼の論拠は、そんな状態で行っても得るものもなく学ぶものもない、とくに自分には昔の外国の友人に会って楽しい時間を過ごすような、贅沢な生活をする時間的余裕もないということだった。しかし、研究所長のソマンボク教授をはじめ、何人かの幹部の説明を聞いて、行かないという自分の論拠は単純で子どもじみているとすぐに理解した。せつかくの機会に、専門家の目から「ペレストロイカ」の本質と実態を深く了解し、見解を定立するのが学術活動のためにも必要なことだった。彼はそうしたことを感じるほど使命感で心が重くなり、モスクワ滞在期間の活動計画を自ら立て、性根をすえてその準備をおこない、出発する三日前に、今回の旧ソ連訪問がキムジョンイル総書記の直接の信頼と配慮であるということを知ったときは胸がいっぱいになり、しばらく何も言えなかつた。

旅客機には、モスクワの他の大学の同窓会に参加する一行3名が乗っていたが、皆自分の思いに浸り、座席を訪ねることも、言葉を交わすこともなかつた。

リュスジンは後ろに倒した座席の背にゆったりともたれて、目をそっと閉じていたが、感激と興奮、密かな緊張で眠れなかつた。30余年ぶりに訪ねていく昔の大学、講堂とキャンパスでともに夢をふくらませたロシアと東欧、アジアの友人たちとの出会い、青春の希望、未来にたいする確信で胸をふくらませて探究の日々をともにした彼らの運命にはどんな変化があつたのだろうか。今、実現しようとする30年ぶりの再会、みな名前を記憶しているだろうか。ああ、さわがしい抱擁、涙、喜び、友情の歌、追憶の歌... 乾杯のグラスの音... 同窓会ではたしてどんなことがおこるのだろうか。...

旅客機がノヴォシビルスク空港に降りて再び舞い上がり、西シベリアの広大な大地の上を飛ぶとき、どういうわけか彼にははじめてこの国、この荒涼とした風が吹く大陸を離れてきた日がふと浮かんだ。体は西側へ、西側へと飛んでいたが、心は考えただけでも懐かしいはるか遠い過去へと飛んでいった。

砲火、砲火、噴き上がる土柱、ふりそそぐ「土の雨」。

リュスジン副小隊長は血まみれになつた小隊長を背負い、砲煙と火炎が渦巻きめちゃめちゃに崩れぬかるむ塹壕を走りながら、喉が張り裂けるほど衛生兵を呼んだ。爆風に耳が潰れてしまったのか、返事はなく姿も見せなかつた。塹壕に埋まってしまったのか、他の負傷兵のところにとんで行ったのか。... 胸の前に垂れ下がった小隊長の腕がだらりと伸びて、背中に冷たいものを感じた。彼は落ち着かずに小隊長を塹壕の上を下ろした。息がなかつた。叫ぶことも泣きわめくこともできず、血と土埃にまみれた胸を手探りで擦り、ゆすってみたが、物凄い地震がおこつたように高地がドーンと戦慄し、大気が荒々しく震えて数千数万発の銃砲弾が炸裂する轟音がとどろいた。空が崩れ落ちるような爆風のなかで軍服の裾が翻つた。

右側の隣接師団の1011.7高地！ 砲煙が厚い雲のように籠つたその高地の麓や中腹の丘で火炎があがり、数百数千の白や黒、灰色の硝煙や土煙の柱がたえずあがり、大気がバリバリ...ドカーン... と戦慄した。

リュスジンは中腰で起き上がり、そちら側を呆然と眺めた。彼は数日前、中隊長の言葉を通じて隣接師団からリュハンム中佐の 175 連隊が 1011.7 高地界線を防御していることを知ってから、いつもその方向を気遣うようになった。米軍の主な攻撃対象は 1011.7 高地の方角であり、つぎの攻撃対象はスジンの連隊が占めている 952 高地に向けられた。敵は 952 高地を突破して 1011.7 高地界線防御の脇と背後を脅かし、わが軍の頑強な防御を一気に突破しようと連日猛攻撃をしてきた。

スジンは父の連隊と境を接して肩を組んで戦うという自負心もなくはなかったが、それよりも、それまで全くしなかった心配を内心感じて気を使うようになり、防御任務遂行では責任感がさらに強くなった。

自分たちの防御線が崩れたら、父にどんな危険が迫るかということをも骨身にしみて感じているスジンは、塹壕をおろそかに掘るのでなく、敵が押し寄せてきたら火の雨のなかを虎のように走り回って、野獣たちの散兵線に火の雨を降らせ、塹壕の胸壁と溝底から白兵戦がくりひろげられると、ためらいなく血戦の中に飛び込んだ。

彼は今、1011.7 高地にふりしきる砲火が大攻勢の歩兵前進のための準備射撃であることを直感し、急いで小隊長を背負おうとしたとき、連絡兵が這ってきて中隊長が呼んでいると叫んだ。駆け寄った戦士に小隊長を任せて中隊部に行った。

中隊長は半分崩れた塹壕の胸壁に腹這いになって、壊れた自動小銃の部品を通信線で銃床にくくりつけながら、大隊の政治部大隊長が民青活動のためかトムズを呼んでいる、はやく行ってこいと言った。彼が小隊長が犠牲になったと言うと、とにかくはやく行けと手を振るので、塹壕にそって下の方に夢中でとんでいった。大隊への交通壕で特務長と会った。人の良い特務長は供給小隊が鯖を送ってくれた、夕食は鯖汁のごちそうなので食事前に帰るようと言った。それで、ニッコリと笑って彼の横をすり抜けた。彼は、これが特務長との永別となろうとは想像もできず、この世で再び会えない火線の戦友のだけれども抱擁も握手もせず出発したのだった。夕方に帰ってきて鯖汁と一緒に食べようとのみ考えながら

...

政治部大隊長は彼を喜んで迎え、なにか良いことがあるようだと言って、連隊隊列参謀に行くようにと言った。そして、側に立っている供給小隊弾薬分隊長に武器を渡して出発し、また来たときには返してもらえと言った。不思議だった。どこからか召喚命令が出されたのは明らかだった。

連隊を経て師団指揮部に入る峠の道を歩きながら、銃砲音がわきあがる 1011.7 高地の方を何度もふりかえった。その山岳方面は大火災の火の海がうねり、真っ黒い煙が重くたちこめ、太陽の光さえも赤茶けていた。砲火の狂乱のなかで連隊を率いて頑強な戦いをくりひろげる父の姿が眼前に浮かび、歩みごとに不吉な予感と錯綜した不安感、わけのわからない呵責に心が重くなった。

師団隊列課に到着すると、他の連隊から来た 2 名の下士官が待っていた。3 名は、隊列課長の指示にしたがって一つの組に編制されて、軍団指令部に向かった。すでに日が暮れていた。二つの師団が共同で使っている大道路に出ると、ヘッドライトを消した補給車や砲車や馬車などが先を争って砲声上がる方角に走り、その方角からは生死の分かれ目の前線の凄絶な空気を漂わせ負傷者の担架の行列が押し寄せてきた。担架の兵士にどこから来た負傷兵かたずねると、ほとんどみな 1011.7 高地界線から来たと答えた。スジンは同行者とともにその担架を担いで歩きながら、負傷兵にその戦闘状況や防御状況についてあれこれたずねた。年のいった負傷兵は汗の匂いを漂わせながら、一日に十余回繰り返される敵の攻撃や、前代未聞の砲射撃、ときどき繰り広げられる肉薄戦について話し、最後に、リュハンム連隊長が軍旗をもって塹壕に現れて戦士たちを鼓舞し、戦士と肩を組んで突撃に参加したと言った。

3 人が軍師団司令部に到着したのは翌日の夜明けだった。背の高い隊列部長が師団からやってきた 9

名の下士官を隊列部の壕から呼び、トンムたちはキムイルソン将軍の配慮で以前に留学していたソ連の大学に派遣され、勉強することになった、きょうの夕方、ピョンヤンに出発する列車便で最高司令部隊列補充局に行き、今後の指示をうけるようにと言った。そしておだやかな顔になり、さらに何か言おうとしたが、隊列部の書記らしい下士官の女性が入ってきて、部長に175連隊長に任命された誰かが出発すると知らせた。隊列部長は見送ってすぐ帰るといって、外に飛び出していった。

スジンは自分の耳を疑った。175連隊長だと？ 父がその連隊長なのに、だれを任命するというのか？

...

すらりとしたその女性にたずねた。

「トンム、いま175連隊と言わなかったか？」

「どうしてですか？」

「前の連隊長がどうなって、新しい連隊長が...」

「そんなこと、どうして分かるの。きのう戦死したと聞いたわよ...」と、頭を真っ直ぐにあげて言った。女性でなかったら殴ってやりたかった。呆然として外に出た。

向こうの夜明け前の闇のなかから、騒々しい話し声とともにブルル...と発動音を立てて車が発車し、しばらくして隊列部長の影がこちらに向かってゆっくりと動いてきた。彼の方に駆け寄った。

「175連隊... リュハンム連隊長が戦死したのですか？」

「だれが、そんなことを？」

隊列部長は激昂して言った。

「書記トンムから聞きました」

「あいつ... とんまめ！」

「正直に言ってください。わたしは彼の息子です」

「よく聞け！」と、彼は荒々しく叫んだ。

「リュハンムはおいそれと倒れる輩ではない！... 鋼鉄のような奴だ！ 岩だ、岩のような奴だ！」

スジンは激情に胸がつかえた。隊列部長はピョンヤン学院時代に父の分隊長だった。彼の話を通じて、父が全身に致命傷を負い、近くの野戦病院に運ばれてきたこと、傷がひどくて出血が多く三日三晩瀕死の状態だったが、心臓がとても強いかすかに動いて持ちこたえていると知った。

彼は留学には行けない、父の連隊が自分の部隊に戻してほしいといっただけ涙を流した。隊列部長は性急にタバコを吸いながら彼の言葉を聞いていたが、留学は君の父親が電話で同意してきた問題なので、ここにきて彼の心に背いていいのかと言った。

翌日の朝、部長は彼を車に乗せて野戦病院に行った。「ショック室」という薄暗く狭い部屋のベッド上に、頭や胸、足にすっぽりと包帯が巻かれた死人とかわらないような人が横たわっていた。父だった。高く吊された薬瓶から細い管をつたって腕や脚に点滴液が一滴また一滴と落ちていた。

スジンがわき起こる悲憤をおさえられず悲痛な声で父を呼ぶと、患者は辛うじて目を開け彼を見つめたが、彼がだれなのか認識できないようだった。息子がくりかえして父を呼んだとき、にわかに見開いた瞳には生気がよみがえってきた。スジンはその目の光から、父の魂の叫びを聞いたような気がした。行け！ 行って先進技術を学ぶのだ、われわれが膨大な血をもって守りぬいたこの地に、強国をうちたてなくてはならない。...

鉄嶺と馬息嶺を越えてピョンヤンに入り、ピョンヤンから義州の留学生講習所に行く長い道すがら、祖国の地はまともな家一つないほど完全に破壊されたことを知った。祖国を発つ夜、無蓋車に乗って鴨緑江の橋を渡るとき、夜間爆撃の火の雨がふる新義州側の上空を眺めて泣いたこと... 一週間の大陸横

断旅行のすえにモスクワのヤロスラフスキー駅に到着したが、男女数百名の旧ソ連大学生がホームに出て、戦う朝鮮から来た留学生を熱狂的に歓迎した。

それは40年前のことだった。

旅客機は、予定より少し遅れてモスクワ郊外のスウエテメチェボ第2国際空港に降り、滑走路を滑っていった。

リュスジンは静かに息をついて、飛行機の窓の外を流れていく大型旅客機の流線形の胴体やゆっくりと動いていく構内バス、四方に薄黒くぼんやりと伸びている滑走路と旅客の無秩序でありながら活気のある動きを見下ろしていた。異国の見慣れない情緒が肺腑にしみ込んできた。

(つづく)